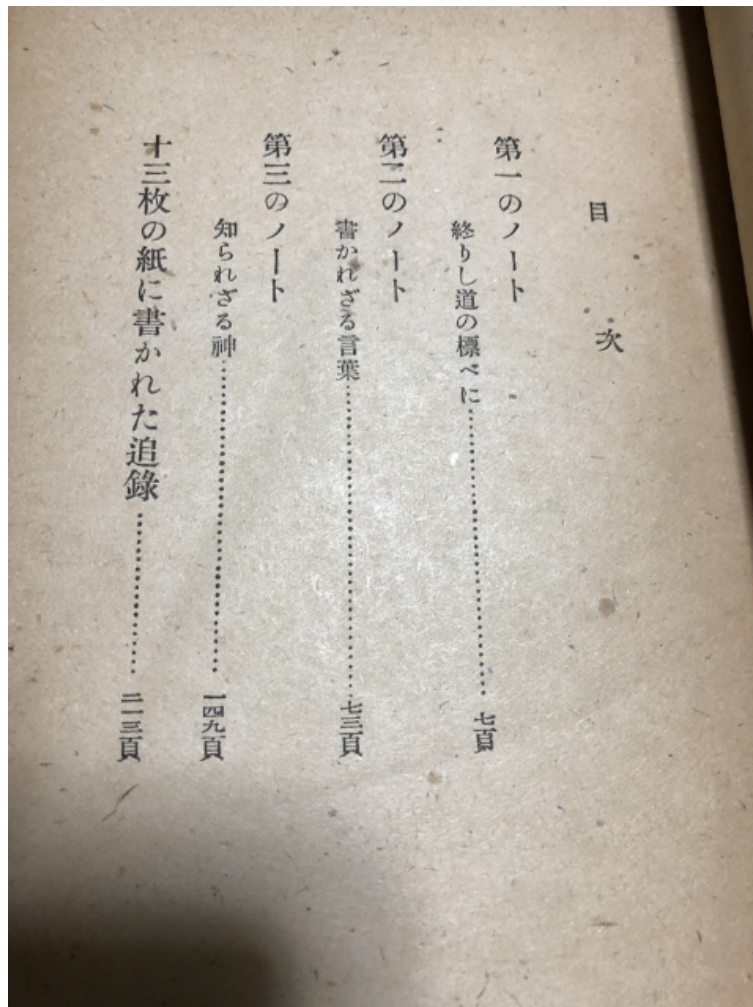


『終りし道の標べに』の目次構成
(存在の三階層+)

『密会』の単行本の体裁を調べてみて、よく似た目次のある本のことを思ひ出しましたので、このことを其のまま読書会のための説明資料3としてお届けします。

『密会』の体裁は、安部公房の処女作『終りし道の標べに』に全く同じでした。当時の初版本の目次は次のものでした。初版本の体裁の写真を最後に載せましたので、ご覧下さい。



目次

第一のノート	七頁
終りし道の標べに
第二のノート	七三頁
書かれざる言葉
第三のノート	一四九頁
知られざる神
十三枚の紙に書かれた追録	二二三頁

この目次の階層構造は、説明資料2としてお届けした下記の「小説『密会』の構造(v2) 存在の3階層』ともの同じです。

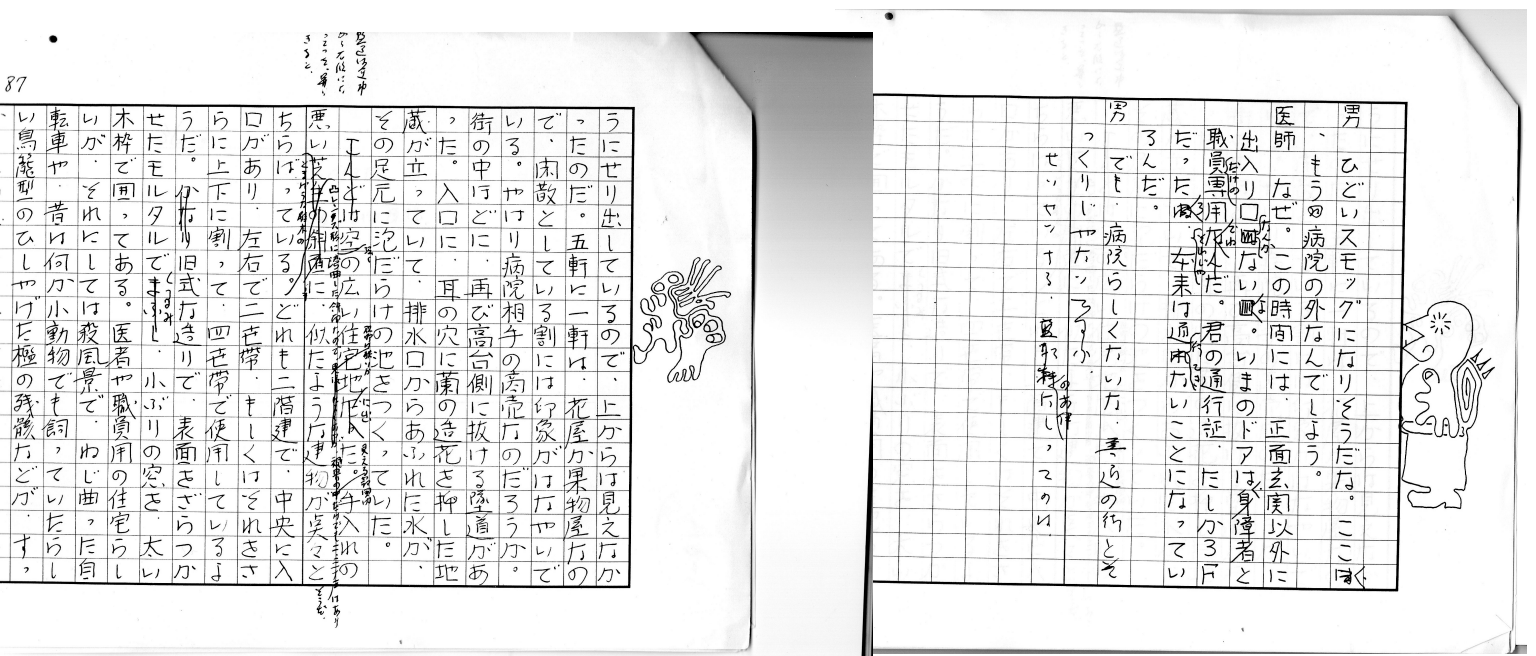
2021/12/22 eiya iwata		小説『密会』の構造(v2) (存在の3階層)							
地上	主人公の妻 (案内人)	誘拐 (突発事件) → 救急車	病院 (<建物)	個別文法 (日本語の文法)	日本語	クレオール語	漁村 浜辺 砂浜 境界 電宮 城	浦島 太郎 の 物語	
地下				普遍文法 (チョムスキー)					
存在	設計図			「開かれたプログラム」 (= 言語)					
余白・沈黙	[[空間 (隙間・歪み)、時間 (遅延=《明日の新聞》)]]								

かうして二つを眺めて比較をしてみますと、『密会』の三階層目の「〈付記〉」が、余白であることに気が付きました。上図にいふ「余白・沈黙」の最深部の階層にあたる余白です。『箱男』について、安部公房が余白は大事だといつてゐる其の余白です。箱男についての箱の内部で壁に書く落書きが、この〈付記〉です。この落書きで安部公房の実際に『密会』の原稿用紙の余白に描いた落書は、「『密会』の書き捨て原稿に描いた安部公房の落書き」（もぐら通信第63号から第65号）と題して掲載しましたので、これらの落書きをご覧ください。

第63号のダウンロードは：<https://docdro.id/62ypij7>

第64号のダウンロードは：<https://docdro.id/4SKBm7h>

第65号のダウンロードは：<https://docdro.id/9lpBNDZ>



ここに至つて私たち読者の知ることは、「明日の新聞」としていつも最後の場面に出て来る安部公房固有の存在論の新聞である《明日の新聞》とは、この『密会』ならば〈付記〉に当たる章であり、処女作『終りし道の標べに』になれば最後の四番目の章である「十三枚の紙に書かれた追録」が其れであるといふことです。試しに今『終りし道の標べに』の最後の章である追録の冒頭第一行を見ると、次のやうになつてゐる。

「夜が明けた。いよいよ本当の夜が明けた。」（全集第1巻、379ページ）

これに対して『密会』の〈付記〉と両脇に三角形の括弧といふ安部公房固有の存在論の記号で囲んで題された余白の章〈付記〉の最初の一行は、既に十分過ぎる位に形象化された安部公房の存在論の、次の隙間の形象となつてゐる。上記の引用は時間の隙間、下記の引用は空間の隙間です。

「車椅子ごと、腕に〔溶骨症の少女を〕抱えるようにして、人工の岩の隙間から這い上がると、記念館前の広場は前夜祭見物の車ですでにいっぱいになっていた。」（全集第26巻、122ページ）（傍線引用者）

本祭の開始する「以前」の、即ち劇場の幕の上がる「以前」の、正確には《開幕五分前》には劇は終はつてゐて《そして開幕のベルも聞かずに劇は終つた》のは（以上『箱男』の二つの章の題名である）のは、夜明け「以前」の夜明け一時間の隙間一、即ち「本当の夜」明け、あるひは「腕に〔溶骨症の少女を〕抱えるようにして、人工の岩の隙間から這い上がる」と其処に「既に」（超越論）存在してゐる「本当の」「広場」一空間の隙間一（傍線は引用者）。主人公が意識を取り戻すのは、「闇の中で意識を取り戻した」と最後の章の最後の節にはさうあり、この節で主人公は「例の明日の新聞がもみくしゃのまま投げ捨てられて」ゐるのを見つけるのです（全集第26巻、138ページ下段）（以後傍線は原文傍点）主人公には劇としての本祭の記憶は「最初からそもそも」（超越論）喪失してゐる。私たちの日常生活は「最初からそもそも」（超越論）喪失の上になりたつてゐる。各自御研究下さい。安部公房の創造する《案内人》を思ひ出して欲しい。或る朝目覚めてみたら自分の名前を喪失してしまひ失はれた名前の印字してある逃走する名刺、一度取り逃して失つたハンミョウ、喪失した凹の顔、最初から「燃えつき」てゐる時間の中に存在してゐない存在の地図、失踪した箱男の書いた箱製作マニュアル、突然救急車に搬送されて失踪した妻、存在しない日時計虫ユープケツチャ、脛から朝目が覚めてみたら生えてゐた隙間だらけのカイワレ大根等々等々。

従ひ、本祭は、「岩の隙間」から這い出て来た時には「既に」（超越論）終はつてしまつてゐる。その過去といふ未来の事件を報じるのが《明日の新聞》です。傑作『第四間氷期』の間氷期の氷期と氷期のアイダ（間）の意味を考へてほしい。この小説全体が隙間での物語であり、隙間からなる作品です。さて従ひ、それ故に、「いくら認めないつもりで

も、明日の新聞に先を越され、ぼくは明日という過去の中で、何度も確実に死に続ける」のです（小説の最後から二行目の文）。さう、最初からそもそも（超越論）時間の中では存在しない《明日の新聞》に現在時点で「先を越され」てみて、既に（超越論）未来に発行されてみた《明日の新聞》に報じられてゐる「明日といふ過去の中で」既に（超越論）死んでゐる生者として」、だから「何度も確実に死に続ける」。

とすると、溶骨症の少女は、最初に失踪した主人公の妻の時間を遡行した女性の「未分化の実存」になつた性分化「以前」の性でありセックスなのかも知れない。即ち、溶骨症の少女はニュートラル・中性の、時間の中では必然である二項対立を超越した従ひ存在なのであり、それ故に、妻には結局会はず仕舞いのまま時間の中での存在即ち実存である主人公は「やさしい一人だけの密会を抱きしめて……」ゐるのであり、初期安部公房以来の（リルケに教はつた）沈黙の記号「……」でさう書いて終つてゐる此の小説の最後の一行が、実はメビウスの環になつて最初私たち読者の表紙に印字されててゐて既に（超越論）目にしてしまつてゐる題名「密会」の意味だといふことになります。《密会》と、小説『箱男』にならつて〔註1〕、さう書くべきでせう。

このやうに考察して参りましても、小説『箱男』は初期安部公房〔註2〕で頻出した存在論の記号〔註3〕の復活といふことですから、後期安部公房20年の幕開け（劇団たる安部公房スタジオの立ち上げと同期。演技論の中心概念はニュートラル即ち存在）の小説として相応しい小説といふことになります。

〔註1〕

『箱男』の章の見出しは全て存在論の記号《》で囲まれてゐる。即ち、全ての各章がいはいば『第四間氷期』なのです。隙間の中での物語であり、隙間を繋いで書いた物語、これが『箱男』だといふことができます。

〔註2〕

『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について（1）』の中の「I 安部公房の自筆年譜と『形象詩集』の関係について」（もぐら通信第56号）より：

初期安部公房の定義

『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』といふ題でお話を致しますが、ここでいふ安部公房文学の「初期」といふ言葉の定義について最初に簡単に説明をして読者のご理解を得てから本題に入ります。

この場合の「初期」とは、既に「『デンドロカカリヤ』論（前篇）」（もぐら通信第53号）にて明らかに致しました「詩人から小説家へ、しかし詩人のままに」のチャート図に基づいて定義をすると、次のやうになります。

1. 狭義には、3つの問題下降の時期、即ち詩人から小説家への変身に3回の問題下降によつて美事に成功する時期、即ち全集によれば詩集『没我の地平』を著した西暦1946年（昭和21年）安部公房22歳から『デンドロカカリヤB』〔註1〕を著した西暦1952年（昭和27年）安部公房28歳までの期間を言ひ、

2. 広義には、3つの問題下降以前の時期、即ち西暦1942年（昭和17年）安部公房1

8歳から西暦1944年（昭和19年）安部公房20歳までの問題下降論確立の時期及び、西暦1945年（昭和20年）安部公房21歳までの1年間を含んだ時期を併せた全体の時間を言ひます。

[註1]

「『デンドロカカリヤ』には二種類あります。一つは、全集によれば「雑誌「表現」版」と呼ばれてゐるもの、もう一つは、「書肆ユリイカ版」と呼ばれてゐるもの、この二つです。便宜上、前者を『デンドロカカリヤA』と呼び、後者を『デンドロカカリヤB』と呼ぶことにします。前者の発行は1948年8月1日、安部公房25歳の時、後者の発行は1952年12月31日、安部公房28歳の時です。この二つの作品の間に、『S・カルマ氏の犯罪』で芥川賞を受賞してゐます。」（「『デンドロカカリヤ』論（前篇）」もぐら通信第53号）

[註3]

安部公房独自の存在論の記号に関する意味の説明を『カンガルー・ノート』論（もぐら通信第66号）の「3.『カンガルー・ノート』の記号論」より引用して、お伝えします。

「3.『カンガルー・ノート』の記号論

- (1) 《 》：《存在》と《現存在》に関する『終りし道の標べに』以来の哲学用語を意味する。
- (2) 『 』：存在の中の存在の詩人または其の物語の作者《縞魚飛魚》の書いた物語についてのものを意味する。
- (3) []：存在の中の存在の中の存在であることを意味する。
- (4) 「 」：地の文にある立て札を意味する。
- (5) ()：存在の中に存在することを意味する。

これらの記号の階層は、次のやうになります。

存在といふ視点から分類すれば、その階層は、階位の高い順に並べると、

- (1) ()
- (2) 《 》
- (3) 『 』
- (4) []
- (5) 「 」

この論考[『カンガルー・ノート』論]をお読みになると次第にお分かりになると思ひますが、この記号の関係そのものが、この小説の構造そのものなのです。」

安部公房が『密会』で初めて「〈付記〉」といふ三角形の鉤括弧を使用したことの意味は、本文での考察の通りに従ふと、「(3) []：存在の中の存在の中の存在であることを意味する」ことに対して、更に余白と沈黙の第四層目の最深部の階層を意味するためだといふことになります。とすると、これ以降の作品にも余白と沈黙の超越論の第四層に〈付記〉の記号が出て来るかと思ひ、『方舟さくら丸』を開いてみますと、最後の第二十五章である「25」の章には次の記号がありました。引用します。

《活魚》の印のトラックが小旗をなびかせていた。旗には「一人の命より 魚の命」と書いてある。

「一人の命より」と「魚の命」の間に、詩人安部公房の初期安部公房以来の一文字分の余白の置いてあることにご留意。詩人安部公房は生きてゐるのです。

さて、とすると〈付記〉の記号が見当たらないので、引き算をする以外にはではなく、とすると残るのは、安部公房が消しゴムを掘って作った各章の冒頭に押した印章画といふことになります。25といふ最後の章の印章画は次のものです。



これと同じ安部公房画伯の手による印章画の押印されてある章は、他には4と18ですから、これら二つの章は最終章25に通じてあるといふことになります。この『方舟さくら丸』の印章画論は後日とします。

以下、「存在の三階層+」の存在論の4階層構造の確定してゐた『終りし道の標べに』（真善美社版）初版本の写真です。



目次

第一のノート

終りし道の標べに……………七頁

第二のノート

書かれざる言葉……………七三頁

第三のノート

知られざる神……………一四九頁

十三枚の紙に書かれた追録……………

二三頁



にべの道しり終

昭和二十三年九月廿日印刷
昭和二十三年十月十日發行
アプレゲール新人創作選・8
定價 百五拾圓

著作者 安部公房

發行者 中野達彦

發行所 眞善美社

東京都港區赤坂溜池町三〇
電話赤坂(四)〇七九五番
會員番號A一一九〇六三

印刷 株式會社 秀英社
製本 金崎製本所